注2　琴歌譜の引声を持つ個所の例（一部）

とよほき　ほきもとほし

かむほき　ほきくるほし　（一九）

したとひに　わかとふつま

したなきに　わがなくつま　（二一）

あらまくをや　すぐにおきて

いでまくをや　すぐにおきて　（一六）

はしのさきや　くひをよろしみ

かひのえのや　つきをよろしみ　（一八）

注3　芝祐泰「五線譜による雅楽総譜」の神楽歌の中に例がある。

注4　句切れを考えれば、字足らず句につづく七音句も考えることが出来よう。

対句以外のその長歌全体の中の位置などについては、長歌自体の形体が一定していない為、分析が困難である。ただ対句と共に形式を整のえる修辞上の技巧である反覆にあって、認められる向きもあるが、対句ほど著しいものではない。

注1　終りの部分の「五・三・七の音の句の、三音の位置のものは除く。また七音句・五音句のいずれの字足らずか不明の場合も除く。

ところで字足らずに対する字余りについては、左のようなことがあるといわれている。[注1] 即ち句中に単独母音を含む場合

短歌　第一・三・五句、　旋頭歌　第一・三・六句
長歌　五音句・結句の七音句　　字余りとなる。

短歌　第三・四句　　旋頭歌　第二・五句
長歌　結句を除く七音句　　字余りとならぬ。

というのである。単語連続・単語結合体など語性によって説明されているようであるが、音数による律格をなす場合、字余り句の存在のみを問題にしてよいのではあるまいか。とすれば、短歌の第一句、及び長歌の五音句―字足らずは第二期に於る傾向―に於ては、一音程度長くも出来れば、短くもなり得ることになり、律格形成の上からいえば破格が二重に許される点、何らかの事情が考えられて然るべきものと思われる。[注2] 三音句のものから六音句の存在までを許すのであるから、単なる音連続では許されないものがあるのではあるまいか。

長歌の対句の字足らずには、年代により数量ならびに性格の変化とみられるものがあった。またその年代に於る変化には、謡う歌、即ち口誦性の濃いものから、読まれる歌へということがあったと考えられている。口誦には一定の形式があるものであった筈であり、たとへ歌謡性より言語性の強い類のものではあっても普通一般のことばとは異なる部分を含む筈である。短歌の第一句、長歌の五音句などは、大体次の七音句で切れるのであるから、七音句よりも前にあるだけ自由性を持ち得るものがあろう。それも短歌の第一句の場合は、最初に位置するのであるから明確にかなり強く発音されはしなかったであろうか。また対句の場合は、同じ調子でいわれたものがあったらしく、[注2] かなり五・七の繰返される四句中の一句が字足らずであるものがみられる。この事情で音の関係を考えれば、歌う際に高音・低音、また強く発音する際など、マ行音・ナ行音の前にひゞかせないで発音を入れることがあるが、この類の或種の音が入ることなどありはしなかったであろうか。[注3] 短歌の字足らずのある句にその類の音が関係する例が多いようである。更に長歌の場合、儀式歌の類にあっては、その歌と共に行われる動作に字足らずを許すものが存在したかも知れない。

以上、万葉集に於ける字足らず句には、歌中に於る位置に傾向が見られ、長歌にあっては時代による性格の変化が考えられるようである。また、字余りの句の位置にも字足らずの句と重なるものがあり、これらのことは単語の音の関係以外の、歌謡性・口誦性に於てみられるべきものと考える。しかし表記に於て一字一音仮名の例が少い。また、そこにも具体的音声を記したものか。音韻の方を記しているのか明確でないものがある。何よりも表記の解明が先決問題であろう。（五十七年十一月）

注1　毛利正守「万葉集・長歌の字余り」（「国語学」百二十六号「国語学会研究発表会発表要旨」による。）

ちちのみの　ちちのみこと（父能美許等）
はははそばの　ははのみこと（母能美己等）　四一六四
かぐはしき　おやのみそと（於夜能御言）　四一六九
このくれ（許乃久礼）　しげきおもひを
底本「能」このくれの（万葉考による）　四一八七
あめつち（天地）　ひつきとともに
やすみしし　わがおほきみ（吾大皇）　四二五四
そらみつ（虚見都）　やまとのくには
かへりこと　まをさむひに（奏日乍）　四二六四
ちとせほき　ほきとよもし（保吉等餘毛之）
底本「保伎」
しらぬひ（之良奴日）　つくしのくには　四二六六
あさなぎに　かことととのへ（可故等登能倍）
ゆふしほに　かぢひきをり（可知比伎乎里）　四三三一
おしてる（於之豆流）　なにはのくにに
やまみれば　みのともしく（見能等母之久）
かはみれば　みのさやけく（見乃佐夜気久）
そきだくも　おぎろなきかも
こきばくも　ゆたけきかも（由多気伎可母）　四三六〇
たらちねの　ははかきなで（波ゝ可伎奈涅）
わかくさの　つまはとりつき
底本「涅泥」　四三九八

以上、まず表記について、最も一字一音仮名の多い第四期にあってもそれは半数程度のものに過ぎず、量に於ても併せて五十例に満たない少なさである。よって訓みの異説のこともあり音節関係の細かい考察はおくことにする。対句に関係のある字足らず句は、第四期の字足らず句の約四割、五音句は一例で以外はすべて七音句である。一方対句に於る字足らずが、集全体のそれの約五割を占めることになっているのであれば、短歌よりも長歌に字足らず句の多くなる主な原因の一つと考えられるのであり、その性格をみてみることが必要となるであろう。次に対句の場合の五音句・七音句に於ける存在をみる。[注1]

	五音句（総数）	七音句（総数）
第一期	七（一六）	八（一三）
	〇・四四％	〇・六一
第二期	一九（四〇）	九（四四）
	〇・四八	〇・二〇
年代作者不明	一二（四〇）	二六（五六）
	〇・三三	〇・四六
第三期	一七（三四）	三四（五五）
	〇・三	〇・六二
第四期	一（一六）	一八（三二）
	〇・〇六	〇・五六

これによれば、五音句と七音句のそれぞれの字足らず句の中に於る割合は、第一期・年代作者不明の場合は七音句の方が五音句より多いがその差はさほどとはいえず、第二期は五音句にかなり多く、第三期及び第四期は逆に七音句が多くなっている。とすれば第二期と第三期及び第四期との間には、字足らずを存在させ得る条件について、何らかの変化のあったことが考えられる。

わがおほきみ　みこのみこと（御子乃命）
　みこのみことの
かけまくも　あやにかしこし
いはまくも　ゆゆしきかも（斎忌志伎可物）　四七五
わがおほきみ　みこのみこと（皇子之命）
　みこのみことの
あさかりに　ししふみおこし
ゆふかりに　とりふみたて（鶉鴫履立）
　とりふみたてて
うまじもの　なはとりつけ（縄取付）
ししじもの　ゆみやかくみて　一〇一九
あなあはれ　ふたぎのはら（布當乃原）
いとたふと　おほみやどころ
　あなおもしろ　一〇五〇
ふりにし（故去之）　さとにしあれば
いくりの（海石之）　しほかれのむた　一〇五九
　わたつみ（海若）の・うみいそ（海石）の　一〇六二
いとこ（伊刀古）なせのきみ（名兄乃君）
そのかはを　たたみにさし（多多弥乍刺）
うづきと（四月）　さつきとのまに
あづさゆみ　やったばさみ（八多婆佐弥）
ひめかふら　やったばさみ（八多婆左弥）
わがつのは　みかさのはやし
わがみみは　みすみのつぼ（御墨坩）
　以下対となる句七　三八八五
いぼつくり　なまりてをる（難麻理与居）
おくとも（雖置）　おくなにいたり
つかねども　つくなにいたり
　底本「立置」
あまてるや　ひのけにほし（日乃異乍干）
さひづるや　からうすにつき
にはにたつ　てうすにつき（手碓子乍春）
　底本「手」なし　三八八六
おぼせる（於婆勢流）　いづみのかはの
なげくそら　やすけなくに（夜須家・奈久乍）　三九〇七
おもふそら　くるしきものを
　底本「家久」　三九六九
はしけやし　あがおくづま（安我於久豆麻）
おばせる（於婆・勢流）　かたかひがはの　三九七八
　底本「波」　四〇〇〇
うみゆかば　みづくかばね（美都久屍）
やまゆかば　くさむすかばね
いやたて（伊夜多氐）　おもひしまさる　四〇九四
あはびたま　いほちもがも（伊保知毛我母）　四一〇一
いきのをに　なげかすこら（奈気加須良）　四一二五
をちこちに　とりふみたて（鳥布美立）　四一五四

みかはの（水河乃）　ふたみのみちゆ　二七六（一本）
みもろの（三毛侶之）　そのやまなみに　一〇九三
みもろの（三諸乃）　かみのおばせる　一七七〇
あさとを（旦戸乎）　はやくなあけそ　二五五五
　底本「旦戸遣乎」　あさのとを、あさどを
あひみて（相見而）　いくびささにも　二五八三
あいみては（而者）あいみては・いくばくひさも・ここだひさにも
いのちを（命）　さきくよけむと　一一四二
　いのちをし・さきくあらむと（吉→在）
いめかと（夢可登）　こころまとひぬ　二九五五
　こころはまどふ
おしてる（押照）　なにはほりえの　二一三五
おしてる（臨照）　なにはすがかさ　二八一九
こせなる（高湍乍有）　のとせのかはの　三〇一八
　こせにある
こよひの（今夜乃）　おほつかなきに　一九五二
　けふのよの
こよひの（今夜乃）　あかときくたち　二二六九
　このよらの
こよひの（今夜之）　ありあけのつくよ　二六七一
　ありあけづくよ
ころもで（衣袖）　あしげのうまの　三三二八
　ころもでを・ころもでも
なにすと（何為迹）　たかひはをらふ　三七九八
　なにせふと・なにすとか（蚊）
みなとの（美奈刀能）　あしがなかなる　三四四五
　底本「能也」　みなとのや
やまとの（日本之）　ふろふのけもも　二八三四
やまとの（山跡之）　うだのまはにの　一三七六
わざみの（和射美能）　みねゆきすぎて　二三四八
こよひの（今夜之）　はやくあけなば　五四八
さつきの（五月之）　はなたちばなを　一五〇二
しらぬひ（白縫）　つくしのわたは　三三六
いづくそ（何所曽）　まそほほるをか　三八四三
　いづくにそ
旋頭歌（いづれも五音句の第一句）
あめなる（天在）　ひめすがはらの　一二七七
　あめにある
はつせの（長谷）　ゆつきがしたに　二三五三
みなとの（水門）　あしのうらばを　一二八八

注1　上の句か、下の句かは主として区切れによる
注2　西本願寺本万葉集

三

次に長歌についてみる。長歌においてもまづ注意されるのは、対句に於る存在である。左に一字一音仮名表記例の比較的多い、年代第四期のものをあげる。対句については共にあげておく。

第三期　短歌　三　一　一
　　長歌　三四　五五　二六
第四期　短歌　一　〇　一
　　長歌　一六　三二　二六

右によれば、第一期・第四期が他の期に対して少く、特に第一期は少い。しかし言語の量に於ては、[注3]第四期は第一期の十倍に近いのであるから、全体について時代の古いものに多いということが出来よう。ただ一字一音仮名表記の例が数の多い部分に少い点、訓みによって動く可能性があることを考えておかなければならない。

注1　旋頭歌―セ、仏足石体歌―仏、連歌―レ、とする。
注2　沢潟久孝・森本治吉著『作者類別万葉集』の頁数による。但し年代作者不明の部は、便宜的に時代順作者に対する記述の部分を欠くのでその点考慮した。
注3

二

形式の一定している短歌の方をみる。用例は多くはないが、その存存する句の位置については、かなり著しい傾向がある。即ち七音句は三例であるがすべて第二句に、五音句が第三句にあるのは三例で、他の三三例はすべて第一句である。次に句と、その句の上又は下につづく句、[注1]国都大観の番号と、訓みの異説などを示す。

七音句

しほかれの　みつのあまの（三津之海女乃）
しほひの・みつのあまめの
いもかめを　とみのさきの（跡見之境乃）　一五六〇
　諸本「始見之埼」定訓なし　万葉考によるもの
やまのへの　いしのみゐは（五十師乃御井者）三二三五

五音句の第三句のもの

たよわき（手弱寸）　をみなにしあれば　四一九
うまさけ（味酒）　みむろのやまは　一〇九四
たまかも（玉鴨）　ちりみだれたる　一六八五
　底本[注2]「玉藻鴨」たまもかも

五音句の第一句のもの

あはぢの（粟路之）　のしまのさきの　二五一
　のしまがさきの
あめなる（天在）　ひとつたなはし　二三六一
　あめにある
うちそを（打麻乎）　をみのおほきみ　二三
　うつそを
うねめの（採女乃）　そでふきかへす　五一
うまさけ（味酒）　みわのやしろの　一五一×
　うまさけを・みわのはふりが（社を祝とす）
うつたに（打田）　ひえはしあまた　二四七六
　うつたには・うちしたに・うつたにも
ふりにし（古之）　おみなにしてや　一二九
みなとに（湖）　さねばふこすげ　二四七〇
　底本「潮」
みもろの（三諸之）みわのかむすぎ　一五六

一四	一		(二三八)
一五			(二〇〇)
一六	二		(九三)(仏一)
一七			(二二七)
一八			(一三一)
一九			(九七)
二〇			(二一八)
計	三九(七三)		(四二七一)(七六二)

長歌

巻	五音句	七音句	所収長歌数
一	一九	一八	(一六)
二	三一	二七	(一九)
三	一一	一七	(二三)
四	四	五	(七)
五	九	一一	(一〇)
六	九	一〇	(二七)
七			(〇)
八	一	七	(六)
九	五	一三	(二二)
一〇			(三)
一一			(〇)
一二			(〇)
一三	三三	五五	(六六)
一四			(〇)
一五	八	一六	(五)
一六	二	二	(八)
一七	二	四	(一四)
一八	七	九	(一〇)
一九	七	九	(一三)
二〇	二	七	(六)
計	一四三	二〇一	(二六五)

以上、短歌では五音句に比較し、七音句に於る字足らずが著しく少く、長歌の方では逆に七音句の方に多く、五音句と七音句の間の差が短歌よりもはるかに少くなっている。また長歌と短歌とでは、その言語の量を考えに入れたとしてもその使用は長歌に多く、あるいは長歌に短歌よりも字足らずが用いられやすい性格を、考え得るものがあるのであるかもしれない。なほ巻による差は、短歌・長歌ともにかなりあるとみられる。

次に作者にもつながる年代による存在をみる。『作者類別 時代順 万葉集』[注2]により、異説のあるものはその古い方による。

巻		五音句	七音句	字足らずのある歌数
第一期	短歌	〇	〇	〇
	長歌	一六	一三	九
第二期	短歌	一八	一	一九
	長歌	四〇	四四	二六
年代作者不明	短歌	一四	一	三九
	長歌	四〇	五六	一八

万葉集の字足らず

中村直子
（児童教育学科・初等教育）

和歌の字足らずは、字余りに比しあまり問題とされることがないようである。それには平安朝以後には殆どみられみられなくなること、使用例が字余りよりも著しく少ないこと、[注1]誦される際などには伸ばしていって差支えがないと考え得ることなどによるものがあるかと思われる。しかし和歌のように平仄も押韻もなく、単に音数律によってのみ律格が構成されるものにあっては、一定した形体による場合、五音・七音の句における二音・三音に及ぶ不足、[注2]また字余り・非字余りにも似た、字足らず・非字足らずともみられるものが存在するということは、[注3]やはり一応考えられてしかるべきものであろう。歌唱の際には曲調の都合によって、音数が動き得るものであるとしても、そこにはそれとしての事情が考えられるべきものがあると思われる。

万葉集には訓みの点で諸説ある歌が多いが、和歌としての形体が整ってきており、量の方から或程度まで補うことも出来ると考えられるので、扱うことにした。本文及び訓みは塙書房刊の『万葉集』による。

注1　一字一音表記の句によれば、字足らずの数は字余りの約一割。

注2　五音句―「きけば（聞者）」（一三〇）、「おきて（置而）」（三三二三）など。七音句―「ひのみこ（日之皇子）」（一六二）など。

注3　「うまさけ・うまさけの」・「おしてる・おしてるや」・「そらみつ・そらにみつ」・「みかはの・みかはなる」など。

まず集の編成と、年代に於る関係をみておく。訓みについての異説その他は、その筒所が問題となる際に扱うことにして、考慮に入れないでおく。左に短歌・長歌・五音句・七音句に分けて巻別に存在する字足らずの句の数をあげる。旋頭歌・仏足石体歌は短歌の部分で、その数の中にその歌体の含まれる数を示すこととする。[注1]

短歌

巻	五音句	七音句	所収短歌数
一	二		（六八）
二	二		（一三一）
三	四	一	（二二九）
四	一		（三〇二）
五			（一〇四）
六			（一三三）
七	四（セ三）		（三五〇）
八	二	一	（二四〇）
九	二		（一二六）（セ一）
一〇	四		（五三六）（セ四）
一一	九		（四九七）（セ一七）
一二	二		（三八三）
一三	一	一	（六〇）